

原 著

佐藤征弥¹・阿部梨沙²・乃村亜由美²・姜 憲³・瀬田勝哉⁴：
日本と朝鮮半島の巨樹—樹種および巨樹にまつわる伝承の比較

Masaya Satoh¹, Risa Abe², Ayumi Nomura², Hun Kang³ and Katsuya Seta⁴：
Giant trees of Japan and the Korean Peninsula: comparison of species and folklore

要 旨 明治時代末の天然記念物保護の機運の高まり受け、大正2年(1913)に刊行された『大日本老樹名木誌』は、各地の著名な樹1500本について、所在地、地上五尺の幹周囲、樹高、樹齡、伝説が記されており、日本の巨樹研究において極めて重要な資料である。また、その6年後の大正8年(1919)には朝鮮総督府から『朝鮮巨樹老樹名木誌』が刊行され、朝鮮半島の3168本の樹について同様のデータが記されている。本研究は、この二つの資料を基に、記載されている樹種や樹の所有者(所在地)、伝承を整理し比較した。樹種でいえば、掲載本数の多い順に『大日本老樹名木誌』ではマツ、スギ、クスノキ、ケヤキ、サクラ、イチョウと続き、『朝鮮巨樹老樹名木誌』ではケヤキ、エノキ・ムクエノキ、イチョウ、チョウセンアカマツ(アカマツのこと)、ヤチダモ、エンジュと続く。樹の所有は日本では、神社や寺院に植えられている割合が高い。一方、朝鮮半島では公有地、地域共同体である「里」や「洞」が圧倒的に多い。これは、地域で樹を祭る習慣があるためである。樹にまつわる伝承をその内容に基づいて分類した結果、樹種による違いが明確に表れた。それぞれの樹種が有する形態的、生理的特徴に起因すると考えられるものも多い。また、日本と朝鮮半島を比較すると、共通点もみられるが、むしろ異なる部分が目立ち、歴史、宗教、文化の違いが反映されている。
キーワード：巨樹、朝鮮半島、伝承、日本、比較文化

Abstract *Dai-Nippon Rouju Meiboku-shi* is a book on trees in Japan published in 1913, when a trend to protect natural monuments was prevailing. It contains the address, trunk circumference at 1.5 m above ground, height, age, and legends and manners of 1500 famous trees. *Chosen Kyoju Rouju Meiboku-shi*, published in 1919, is a similar book of 3168 trees in the Korean Peninsula. In this study we tried to understand trees of Japan and the Korean Peninsula botanically and culturally based on these books. The major trees in *Dai-Nippon Rouju Meiboku-shi* are *Pinus* spp., *Cryptomeria japonica*, *Cinnamomum camphora*, *Zelkova serrata*, *Cerasus* spp., and *Ginkgo biloba*, and those in *Chosen Kyoju Rouju Meiboku-shi* are *Zelkova serrata*, *Celtis sinensis* and *Aphananthe aspera*, *Ginkgo biloba*, *Pinus densiflora*, *Fraxinus mandshurica*, and *Styphnolobium japonicum*. Major owners of the trees are shrines and temples in Japan, and regional communities in the Korean Peninsula. Legends of the trees vary depending on the species and seem to have partly originated from their morphological and physiological features. Moreover, comparison of the folklore about the trees brought out the difference in history, religion, and culture between Japan and the Korean Peninsula.

Key words: comparative culture, folklore, giant tree, Japan, the Korean Peninsula

はじめに

日本各地の巨樹の伝承を記した柳田國男の『神樹篇』¹⁾や、巨樹と日本人の精神性との結びつきを説いた牧野和春

や瀬田勝哉や野本寛一の著作など巨樹に関する著述は少なくない(柳田, 1969; 牧野, 1986, 2000, 2002; 瀬田, 2000; 野本, 2008)。そうした中で極めて重要な資料であ

¹ 〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1-1 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 (e-mail: satoh@ias.tokushima-u.ac.jp)

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, Minamijosanjima-cho 1-1, Tokushima 770-8502, Japan

² 〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1-1 徳島大学総合科学部

Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima, Minamijosanjima-cho 1-1, Tokushima 770-8502, Japan

³ 〒445-743 大韓民国京畿道華城市峰潭邑臥牛里 水原大学環境工学部

Department of Environmental and Energy Engineering, College of Engineering, The University of Suwon, Wau-ri, Bongdam-eup, Hwaseong-si, Gyeonggi-do 445-743, Korea

⁴ 〒176-8534 東京都練馬区豊玉上1-26-1 武蔵大学人文学部

Department of Japanese and East-Asian Studies and Comparative Culture, Faculty of Humanities, Musashi University, 1-26-1 Toyotama-kami, Nerima-ku, Tokyo 176-8534, Japan

りながら研究として正面からとりあげてこなかったものに『大日本老樹名木誌』(本多, 1913)がある。同書は、東京帝国大学農科大学の本多静六博士が、自ら行った調査や全国各地に呼びかけて集めた老樹・名木のデータを編纂し、大正2年(1913)に大日本山林会が発行したものである。収められた1500本の樹について所在地、地上五尺の周囲、樹高、樹齡、伝説が記されており、写真が掲載されている樹もある。このような調査が行われた背景には、自然保護や文化財保護の気運が当時高まっていたことがある。明治期の近代化により開発や生物の乱獲が進んだことを憂慮して、明治44年(1911)史蹟名勝天然紀念物保存協会(当時は天然「記」念物ではなく天然「紀」念物と表記することが多かった)が創立され、大正8年(1919)には、天然紀念物に関する最初の法律である史蹟名勝天然紀念物保存法が公布されている。『大日本老樹名木誌』の前書きには「本書ハ林學、林業上ノ資料及ビ一般世人ノ所謂天然紀念物特ニ老樹名木保存ノ資料トシテ編纂セルモノナリ」とある(同書では天然「記」念物と表記)。

『大日本老樹名木誌』が刊行されてから6年後の大正8年(1919)朝鮮総督府から『朝鮮巨樹老樹名木誌』が刊行された(石戸谷, 1919)。同書は、朝鮮半島(現在の韓国と北朝鮮)の巨樹・老樹・名木の調査結果を、朝鮮総督府の石戸谷勉技手が編集したものである。「巨樹」という言葉が付加されていることが、日本のそれとは違っている。記載されている項目は、所在地、地上五尺(1.5 m)の周囲、樹高、樹齡、種類(目的や用途)、故事伝説であり、緒言に「林學上ノ資料及ビ巨樹老樹名木保存ノ資料トシテ編纂セルモノナリ」とあるように編纂意図や内容は『大日本老樹名木誌』をほぼ踏襲している。

『朝鮮巨樹老樹名木誌』が作られた時代の朝鮮半島の植生は、大正7年(1918)に刊行された『朝鮮地誌』²⁾によれば、植物の生産が良好であり、鴨緑江や豆満江上流には広大な森林が広がっていること、樹木の生育状態は日本と同一の点が多いことが記されている。一方、荒廃し禿げ山となっている地域も多く、明治44年(1911)の森林令公布や大正7年(1918)年の林野調査事業により国有林化を進めて森林管理を行なった(姜, 1987)。

本論文は、この二つの資料を比較することで、両国の巨樹に対する精神性や文化の違いを明らかにすることを試みた。また、90年以上前に記された巨樹たちが、今日どうなっているか、現代の資料との比較を行って確認した。日本については『日本の巨樹・巨木林調査』を参照した。これは1988年環境庁(当時)が各都道府県に委託して巨樹・巨木林について調査を実施したもので、1990年にその報告書の全国版と概要版が、その翌年に地方別の分冊が刊行された³⁾。さらに2000年にフォローアップ調査が実施され、

2001年にその報告書が刊行された⁴⁾。現在は、「巨樹・巨木林データベース」としてウェブ上に公開され、逐次データが更新されている⁵⁾。一方、韓国においても巨樹の情報がデータベース化されている。韓国では1998年から生物資源の安定的保存と体系的管理のために、山林庁と国立樹木園が協力して植物種情報データベース構築事業が始まり、山林庁が管理するウェブサイト「国家生物種知識情報システム」でその情報を閲覧することができる⁶⁾。これら両国のデータベースを基に『大日本老樹名木誌』と『朝鮮巨樹老樹名木誌』に記載されている巨樹がどれだけ残っているかを調べるとともに、巨樹をとりまく状況がどのように変化したのかについても触れることにした。

1. 資料の性格について

『大日本老樹名木誌』と『朝鮮巨樹老樹名木誌』がどのような資料であるか、その編集意図や内容の相違点についてもう少し補足しておこう。

1-1. 調査時期

『大日本老樹名木誌』の緒言には、本多静六博士が過去20余年間に各地を訪ねて実測・蒐集したデータと、大正元年(1912)に全国各地の林業技師や篤志家に依頼して調査したデータを併せたこととある。また、5本多が過去に集めたデータは、大正元年(1912)に再調査されている。集められたデータは全部で5922本、その中から、目通り幹周囲が一定以上の大きさの樹(クスノキ、ケヤキ、スギ、イチヨウは2丈(6.1 m)以上、マツは1丈五尺(4.5 m)以上、サクラは1丈(3.0 m)以上など)⁷⁾や、特に記しておくべき伝説を有する樹、もしくは特に著名な樹を選んで、最終的に1500本としている。

『朝鮮巨樹老樹名木誌』は、各道において大正5年(1916)中に実測した5300本余りから幹の大きなもの、著名なもの、故事伝説を有するものなどを考慮しておよそ3200本が選ばれたと記されている。また、調査に際して幹周囲や樹高の測定に関して正確さを保証するために、サイズの大きな樹については専門家による再調査が実施されている。

『大日本老樹名木誌』には、当時日本統治下にあった朝鮮半島の樹が28本掲載されており、本来なら『朝鮮巨樹老樹名木誌』にも掲載されていなければおかしいのだが、実際は見あたらなかったり、住所や樹の大きさのデータや伝承などが食い違っているものがある。その理由は不明であるが、調査時期が新しく、かつ精緻な調査がなされていると考えられる『朝鮮巨樹老樹名木誌』の方が正確であると考え、『大日本老樹名木誌』の朝鮮半島の樹は本論文のデータから外すことにした。

1-2. 「巨樹」という言葉について

二つの資料の大きな違いとして挙げられるのが、本のタイトルの「巨樹」という言葉である。『朝鮮巨樹老樹名木誌』には「巨樹」という言葉が使われているのに対して、『大日本老樹名木誌』のタイトルには「巨樹」という言葉が使われていない。昭和25年（1950）公布施行された文化財保護法では、天然記念物の植物の第一要目に「一、名木、巨樹、老樹、畸形木、栽培植物の原木、並木、社叢」と規定されており、「巨樹」は「名木」や「老樹」その他と並んで表記されている。この法律の前身である史蹟名勝天然記念物保存法は大正8年（1919）に公布施行されたが、その前年の大正7年（1918）の「史蹟名勝天然記念物保存要綱草案（續）」⁸⁾にも「名木、巨樹、老樹」と記されている。

そもそも、明治末期に天然記念物という概念を日本に紹介し、法令の整備を訴えた三好学の初期の著作には、「巨樹」という言葉がまったく用いられていない⁹⁾。明治43年（1910）の『日本之植物界』の中で彼は巨大な樹を「大木」と呼び、「老樹の歴史」「名木の保存」という章の中で扱っている。同書には「老樹の歴史」「名木の保存」という章が設けられていて、「大木」はこれらの章の中で紹介されているが、この段階では「大木」もましてや「巨樹」も独立した概念としては捉えられてはいない。その後、本多も『大日本老樹名木誌』の編集にあたり、冒頭で「天然記念物特ニ老樹名木保存ノ資料トシテ編纂セルモノナリ」とあるように、天然記念物制定の動きを強く意識している。三好に倣って「老樹」や「名木」という言葉は用いても「巨樹」という言葉は使っていない。ただし、同書の中で「巨樹」という言葉がまったく存在しないわけではない。個々の樹の「伝説」において掲載番号1番のクスノキや掲載番号916番のムクノキは、それぞれ「我国第一ノ巨樹」「古来著明ノ巨樹」と表現されている。

『大日本老樹名木誌』が刊行されて3年後の大正5年（1916）の6月20日に朝鮮総督府が「巨樹名木ノ保護ニ関スル件」という通牒を出している¹⁰⁾。ここで「巨樹」という言葉が重要な位置づけを有する形で登場する。この年は『朝鮮巨樹老樹名木誌』（大正8年（1919）刊）の調査を実施した時期と一致しており、通牒の発令と樹の調査が連動していることは明白である。このように大正2年（1913）から大正5年（1916）の間に「巨樹」という言葉が大きくクローズアップされている。もともと、「巨樹」という言葉自体は、明治中期にはすでに使用例がみられるが、後のように巨大な樹という意味ではない¹¹⁾。大正時代前半の天然記念物制定に関わる議論の中で、巨大な樹の価値に対する認識が高まり、それに伴って「大木」とは別の言葉が必要とされるようになり、「巨樹」という言葉が採用されたのではないかと思われる。

1-3. 『朝鮮巨樹老樹名木誌』の樹の「種類」

『朝鮮巨樹老樹名木誌』では、樹に関するデータの中に「種類」と「所有者」の欄が設けられているのに対し、『大日本老樹名木誌』にはそれらが無い。

『朝鮮巨樹老樹名木誌』には「種類」について「樹木ハ禁養ノ事由ヲ一見明ニスル為種類ノ項目ヲ設ケ神木、堂山木、護岸木、亭子木、避暑木、風致木、名木ノ七二区別記載シ…」と説明している。「禁養」とは樹の伐採を禁じることであり、その根拠となる樹の重要性を7つ挙げている。「避暑木」と「護岸木」は説明するまでもない。それ以外の区分について簡単に触れておく¹²⁾。「神木」は、名府君木や將軍木とも称されて樹に神霊が宿ると言い伝えられているもの、または樹を神体として祭壇を設けて家や地域で祀っているものを指す¹³⁾。「堂山木」は、城隍^{じょうこう}木や堂社木とも称されて山祭堂、城隍堂、神堂などの堂宇の背後に植えられているもの、「亭子木」は儒教の学校、射亭（弓術場）、別荘、亭などの側に陰影樹または風致木として植えられているものを指す。「名木」は聖賢、王族、偉人等の手植えのものが多く、まれに王室から位階を賜った樹もあると説明されている。

1-4. 樹の「所在地」「所有者」について

『大日本老樹名木誌』には「所在地」の項目に住所が記され、それに続いて「〇〇境内」や「〇〇氏宅地内」と表記されているが、必ずしも所有者は明確ではない。一方、『朝鮮巨樹老樹名木誌』では「所在地」の項目がさらに「道」「府郡面洞里」「所有者」と細分化され、所有者が明記されている。明記した理由は、所有者をはっきりさせておくことにより、樹の保護・管理を徹底させたいという意図であろう。「種類」を設けた理由と同じく、樹を伐採から守るという目的がみとれる。

2. 『大日本老樹名木誌』にみられる日本の樹の特徴

本章では『大日本老樹名木誌』に掲載された樹を分析し、日本の樹の特徴について述べる。

2-1. 樹種

掲載本数の多い樹種を順番に挙げると、マツ (*Pinus* spp.) が377本と最も多く、以下スギ (*Cryptomeria japonica*) 286本、クスノキ (*Cinnamomum camphora*) 129本、ケヤキ (*Zelkova serrata*) 119本、サクラ (*Cerasus* spp.) 98本、イチョウ (*Ginkgo biloba*) 96本、シイ (*Castanopsis* spp.) 26本、ウメ (*Prunus mume*) 24本と続く（以下省略）。マツはアカマツ (*Pinus densiflora*) とクロマツ (*P. thunbergii*) を区別しておらず、両方を含んだ数字である。またサクラについても種類を区別しておら

表1 『大日本老樹名木誌』の掲載本数上位6種における所有者(所在地)

Table 1 Owners (addresses) of trees of the major six species in *Dai-Nippon Rouju Meiboku-shi*

所有者	マツ (375本)*		スギ (286本)		クスノキ (129本)		イチヨウ (88本)*		ケヤキ (113本)*		サクラ (97本)*	
	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%
私有	9	2.4	1	0.3	1	0.8	3	3.4	2	1.8	4	4.1
神社	86	22.9	145	50.7	89	69.0	27	30.7	58	51.3	20	20.7
(現在)**		(13.6)		(41.6)		(59.2)		(28.2)		(35.1)		(10.6)
寺	60	16.0	51	17.8	8	6.2	22	25.0	10	8.8	30	30.9
(現在)**		(8.6)		(6.2)		(6.1)		(18.1)		(6.1)		(6.4)
お堂など	12	3.2	13	4.5	5	3.9	9	10.2	6	5.3	11	11.3
拝所	4	1.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
公園	6	1.6	1	0.3	0	0.0	1	1.1	3	2.7	2	2.0
城(城址)	4	1.1	1	0.3	0	0.0	0	0.0	1	0.9	1	1.0
その他	5	1.3	1	0.3	1	0.8	1	1.1	1	0.9	1	1.0
不明	189	50.4	73	25.5	25	19.4	25	28.4	32	28.3	28	29.0

* マツ, イチョウ, ケヤキ, サクラの掲載本数はそれぞれ377本, 96本, 119本, 98本であるが, ここでは朝鮮半島の樹を除いている。

** 「巨樹巨木林データベース」⁵⁾を参照して集計した。

ず, 複数の種が含まれている。以下, 掲載本数の多い6種のデータについて分析した。6種に限ったのは, 掲載本数が7位のシイから数が大きく減っているからである。これら6種のうちスギ, イチョウ, クスノキ, ケヤキの4種は特に大きく成長することから「四天王樹」と呼ばれている。また, 残る2種マツとサクラは大木にはなりにくいものの古来より日本人に親しまれてきた樹種である。マツの特徴について坪井洋文は「枝の伸び様が他の木にもまして人の目をひきたて, 樹齢も長いためもあるが, 不思議と荒地や岩石の間に生い茂るので, 種々の伝説の附会するところとなっている」と記しているが(坪井, 1974), ここに老樹名木を集めた『大日本老樹名木誌』においてマツの掲載本数が最も多い理由が集約されていると思われる。

2-2. 樹の所有者(所在地)

表1に6種について所在地を整理した結果を示す。同書では「所在地」として記載されているため, 記載されている施設や個人が必ずしも本当の所有者ではない可能性がある。

樹の所在は, 不明なものを除くと神社と寺院に圧倒的に多い。しかし神社と寺院の比率は樹種によってかなり差がみられる。神社にはクスノキが多く, クスノキ全体の7割が神社にある。一方, 神社の割合が低いサクラでは2割であり, その差は顕著である。サクラは寺院に多く, 3割を占めていて6種の中では最も寺院の割合が高い。逆に最も寺院の割合が低いのは, 神社で最も割合の高かったクスノキであり, 数値は6.2%とこれまた樹種による差が顕著にみられた。

「お堂など」は神道, 仏教, 修験道に関係した宗教施設であるが, 宗教別に分けることができないため一つにまとめた。これに含まれる樹の割合はサクラとイチヨウが高くなっている。

「拝所」に属する樹はマツで4カ所見られる。「拝所」とは沖縄地方において神が集まり, 拝むための信仰の場所のことである。同書はマツとしか記されていないが, アカマツやクロマツは沖縄では育たない。ここではリュウキュウマツを指しているものと思われる。

表1において神社と寺院の項目にはカッコの中に現在の数値を示した。これはインターネット上に公開されている前述の「巨樹・巨木林データベース」に基づく現在の割合である¹⁴⁾。「巨樹・巨木林データベース」では樹の所有者の区分が「国」「都道府県」「市町村」「その他公有」「社寺」「個人」「法人等」「不明」の8つに分類されている。ここでは『大日本老樹名木誌』と比較が可能な神社と寺院についてのみ全体に占める割合を調べた。データベースでは神社と寺院が分かれておらず「社寺」で一括りになっているのだが, 別途記されている所有者の名称を判断して神社と寺を分けた。区別できないものについては省いた。

数値を比べると, どの樹種においても神社や寺院の占める割合が昔よりも下がっている。これは昔と比べて調査の精度が上がり, かつて調査から漏れていた樹がリストアップされることにより, 注目されやすい寺社に植えられている樹以外のものが増えたのではないと思われる。しかし, クスノキが神社に多く, イチョウが寺院に多いということは『大日本老樹名木誌』の当時と現在で変わらないようである。

表2 『大日本老樹名木誌』の掲載本数上位6種における伝承の内容
Table 2 Folklore of trees of the major six species in *Dai-Nippon Rouju Meiboku-shi*

伝承の内容	マツ (375本) *		スギ (286本)		クスノキ (129本)		イチヨウ (88本) *		ケヤキ (113本) *		サクラ (97本) *	
	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%
a 何かを掛ける, 引っかかる	25	6.7	5	1.7	3	2.3	2	2.3	1	0.9	3	3.1
b 樹下で休憩	6	1.6	1	0.4	1	0.8	0	0.0	0	0.0	1	1.0
c 馬や船を繋ぐ	7	1.9	0	0.0	3	2.3	2	2.3	1	0.9	2	2.1
d 天狗	4	1.1	9	3.1	1	0.8	1	1.1	1	0.9	0	0.0
e 占い, 気候の予測・目安	0	0.0	1	0.4	0	0.0	5	5.7	1	0.9	4	4.1
f 航海の目標	7	1.9	2	0.7	0	0.0	0	0.0	3	2.7	0	0.0
g 血を流す	2	0.5	6	2.1	0	0.0	0	0.0	1	0.9	0	0.0
h 枯死したものから萌芽	0	0.0	0	0.0	5	3.9	1	1.1	0	0.0	6	6.2
i 祈願 (病氣平癒)	9	2.4	11	3.8	3	2.3	3	3.4	2	1.8	4	4.1
j 祈願 (安産, 子授け)	2	0.5	7	2.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
k 祈願 (乳信仰)	0	0.0	1	0.4	0	0.0	19	22.0	0	0.0	1	1.0
l 戦捷祈願・凱旋記念	11	2.9	6	2.1	5	3.9	1	1.1	4	3.5	2	2.1
m 墓標	24	6.4	8	2.8	3	2.3	7	8.0	0	0.0	4	4.1
n 女性	18	4.8	8	2.8	2	1.6	5	5.7	2	1.8	5	5.2
o 女神	0	0.0	2	0.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0
p 祟り	8	2.1	10	3.5	2	1.6	1	1.1	3	2.7	1	1.0
q 杖立てなど	1	0.3	12	4.2	2	1.6	6	6.8	2	1.8	2	2.1
r 光る	11	2.9	8	2.8	1	0.8	0	0.0	1	0.9	1	1.0

* マツ, イチヨウ, ケヤキ, サクラの掲載本数はそれぞれ377本, 96本, 119本, 98本であるが, ここでは朝鮮半島の樹を除いている。

2-3. 「伝説」にみられる特徴

『大日本老樹名木誌』には「伝説」という項目が設けられており, そこには伝説にとどまらず, 各々の樹にまつわる伝承, 歴史, 信仰, 習俗・慣習が幅広く記されている。それらの内容を整理し, 樹種ごとにまとめたのが表2である¹⁵⁾。表では, その内容が何本の樹に見られたかを本数で, またそれを各樹種の掲載本数で割った値(頻度)を%で示す。頻度を示したのは, 掲載本数の多寡によらずにその項目が樹種によって生じやすいかどうかをみるためである。

巨樹と人との関係性については, 牧野(1986, 2000)や野本(1994, 2008)が分類した例があるが, 本論文では植物学からの視点を重視して, 樹の形態に関わると思われる事(a-d), 樹の生理に関わる事(e-h), その他(i-r)に分けた。

2-3-1. 樹の形態に関わるもの

a「掛ける, 引っかかる」: これは樹の梢や枝に何かを掛けたり, あるいは引っかかったと伝えられているもので, そのような物には旗や衣, 武具, 法具などがある。棺が空に飛び去る途中で樹に引っかかったというものもある。このタイプの伝承を有する割合はマツが突出して多い。マツでは人の手の届く高さに横に伸びる枝が派生していることが多いので, この伝説が生じやすいのがその理由であろう。他の樹種では, 数値では大きな差はないのだが, ケヤキや

スギで頻度が低いのは, 枝が上向きに派生するケヤキや成長すると低い枝が失われるスギでは, 掛けるという行為にそぐわないためであろう。

b「樹下で休憩」: 歴史上の著名人が旅や戦争の途中, 樹下で休憩したと伝えられるものであり, 上記同様マツが突出して多く, 他の樹種ではあまりみられない。これは先の「掛ける, 引っかかる」と関連性が高いと思われる。例えば「弘法大師が休憩して袈裟を掛けた」という二つが直接重なっている内容がみられるし, はっきりと「休憩した」と記されていないくても, 衣を掛ける, 武具を掛ける, 旗を掲げるということは樹下でしばらく立ち止まることを意味しているからである。

c「馬や船を繋ぐ」: 馬や船を樹に繋いだと伝えられるもので, 何かを樹に固定するという意味では上記の「掛ける, 引っかかる」に似ている。しかし, この場合は馬も船も大きなもので, 繋ぐのは枝ではなく幹となる点で異なっている。樹形や枝振りは関係なく, ちょっとやそつとでは折れない巨樹であればいいのであって, 頻度をみてもスギでまったく見られないという以外には樹種には関係ないようである。

d「天狗」: 天狗が樹に住む, あるいは樹に訪れると伝

えられるもので、本数も頻度もスギが突出して高い。これは木が高く成長するという性質によるものであろう。また、天狗は高いスギを住処とするという話が定着することによって各地のスギの高木と同様の話が生まれやすいということもあろう。

2-3-2. 樹の生理に関わるもの

e 「占い、気候の予測や目安」：樹の様子の変化を、気候予測、農作業の目安、豊作凶作の占いに結びつけたものであり、イチョウとサクラで頻度が高い。イチョウでは、すべてが落葉に関する内容となっていて、落葉時期から降雪時期を知るというものが3本、落葉が急だと降雪も急で、徐々に落葉すると徐々に降雪するというものが1本、落葉の状況で翌年の豊凶を知るというものが1本である。サクラでは、すべてが開花時期と田植えの時期の関連性についての内容である。このような桜は「種まき桜」と呼ばれ、特に会津地方に多いことが指摘されている（牧野，2002）。『大日本老樹名木誌』では、会津地方以外に山形や広島のスクラにも同様の内容が記されている。

他の樹種では、スギに「幹のコブが豊凶により上下する」というものが1本あり、ケヤキで神社の拝殿の左右に位置する2本の大ケヤキがあり、どちらの芽吹きが早いかで米がよくとれるか畑の作物がよくとれるかを占う、というものがある。

サクラの開花やイチョウの落葉といった樹の分かりやすい変化が田植えや降雪時期に重なる地域では、それを指標とすることは極めて自然である。同様に、常緑樹であり花も目立たないマツ、スギ、クスノキではこのような言い伝えや慣習がほとんど存在しないことも理解できる。一方、ケヤキは落葉樹であるが、イチョウとは異なり、このような言い伝えが記されているのは1本しかない。その理由は、イチョウがいつせいに色づきいつせいに落葉するのに比べて、ケヤキは変化が緩やかであるために気候変化の指標として適していないということではないだろうか。

f 「航海の目標」：水夫が目立つ樹を地理情報として利用しているというものである。頻度でみるとケヤキが最も高いが、ケヤキは特に塩害に強い樹種ではなく、海岸線に多い訳ではないので樹の性質そのものにその原因があるとは思われない。頻度が高いといっても数は3本であり、そのうちの2本は富山県の樹であることから、その地域の歴史的背景に起因しているのかもしれない。伝説の数でいえばマツが最も多い。これはマツが塩害に強く、かつ養分が不足した地でも生育できるため海岸に多いことがその理由であろう。野本（2008）も海辺の老松が、船着き場や漁場の指標とされていることを指摘している。

g 「血を流す」：枝や幹を伐られた樹が血を流すという言い伝えであり、スギ、マツ、ケヤキでみられ、特にスギに多いのが特徴である。日野巖は『植物怪異伝説新考』の中で「血の出る樹」という章を設けてこれを取り上げている（日野，1978）。日本各地の例では、『大日本老樹名木誌』と同じくスギが最も多いのだが、マツ、クスノキ、ケヤキもみられる（その他数種を挙げている）。北條勝貴が樹の伐採抵抗に関する全国各地の伝承をまとめたものには、伐られて血を流したという樹が64本記されており、最も多いのがマツで16本、次いでスギが14本で、この2種が多く、他にクスノキとケヤキが5本ずつ、ヤナギが3本と続き、樹種としては全体で15種にみられる（北條，2003）。資料により差はあるのだが、スギとマツに多くみられるとあってよいだろう。

植物が血を流すというのは、あり得ない話だが、このタイプの言い伝えが各地に数多く存在するからには、「血を流す」行為を連想させる現象があるのだろう。可能性として考えられるのが、傷口からの樹脂の分泌である。樹脂に関しては、マツにおいて分泌が特に盛んであることはよく知られている。マツでは普段から活発に樹脂が分泌されているのに対して、スギでは傷を受けると分泌されることが知られており（山中，1984）、それがスギにこの言い伝えが多い理由であると思われる。樹脂を分泌しない種類について『植物怪異伝説新考』では、*Fusarium* 菌により赤く変色した液の漏出という生理現象による説を紹介している（日野，1978）。

h 「萌芽」：枯死して樹の根元から新しい個体が芽を出して成長したと伝えられるもので、樹の生命力や不死を讃えていると言える。初代の木が枯れて現在の木が「その後継がられたもの」とか「何代目」と記されている樹も散見される。しかし、それはもともと隣接していた別の樹であったり、他所から移し替えて何代目としたというケースも考えられ、必ずしも樹の生命力や不死を示すとは限らないため、枯死した樹から萌芽したと明記されているものだけをリストアップした。樹種でみるとサクラとクスノキで顕著である。

枯死した株の根元や伐られた切り株から芽吹いて新しい個体が成長する現象は萌芽更新と呼ばれ、樹木の繁殖法の一つである。クスノキは萌芽力が旺盛で剪定にも強いことが知られている（竹内，1975）。萌芽更新の言い伝えを有するクスノキは5本であるが、その全部が今も残っている。サクラの中でヤマザクラ群やエドヒガン群は萌芽更新能力を有することが知られている。しかし、この言い伝えが記されている7本のサクラのうち多くは絶えてしまい、現存が確認できたのは福島県大沼郡高田町文殊堂（現在は福島

県会津美里町高田文殊院のエドヒガン)の1本だけであった。石川県珠洲郡寶立村見付法住寺(現在は珠洲市宝立町春日野法住寺)のサクラはその後枯れて、新しく植えたが、それが萌芽によるものかどうかは不明である。

萌芽更新能力はイチョウやケヤキも有していて、ケヤキは資料中に萌芽の話は見られないが、イチョウでは1本ある。なお、マツとスギは萌芽更新を行わず、このタイプの話は記されていない。

2-3-3. その他

i-1「祈願」:巨樹に願い事するという慣習や言い伝えは多いが、数の多いタイプとしてi「病氣平癒」、j「安産、子授け」、k「乳信仰」、l「戦勝祈願、凱旋記念」の四つにまとめた。

「乳信仰」というのは、女性が母乳の量に困らないように樹に願掛けをするという風習である。「病氣平癒」は、樹種による偏りは見られないが、「乳信仰」はイチョウ以外にはスギで1本みられるだけであり、イチョウに特有と言ってよい。イチョウで「乳信仰」が発生した理由は、古いイチョウでは幹や枝から下垂する氷柱状の組織が発達し、それが女性の乳房に見立てられるためであり、特に発達した樹は「乳イチョウ」と呼ばれている。これも樹の形態から発生したものであるが、願掛けと結びついているのでここで取りあげた。

「安産、子授け」はスギとマツだけに見られ、特にスギでその頻度が高いが、その理由は不明である。

「戦勝祈願・凱旋記念」は戦に際して樹に勝利を祈願したり、勝利した記念に樹を植えたというものである。凱旋記念に植えたものを祈願に含めるのは行為から見れば正しくはないが、戦勝祈願とペアにするのが妥当であるので、ここに含めた。これに含まれる樹は、神社の樹に多くみられ、全体29本のうち半分の15本が神社の樹である(一方、寺は2本だけである)。それを反映しているためか、割合の高い樹種は、表1でみた神社の頻度が高い樹種と一致している。

m「墓標」:死者の墓標として植えられたと伝えられる樹である。樹種によって頻度がかなり異なり、マツとイチョウで顕著に高く、逆にケヤキでは1本もみられない。マツが多いことに関して、『資料 日本植物文化誌』(有岡, 2005)には、非業な死に方をした人の塚や墓には、むかしからマツが植えられてきたことが記されている。そしてマツであること理由について同書では、死者が三途の川にくと、奪衣婆により衣を剥がされて、その衣を木の枝に掛けて重さを計り、その重みが生前の罪業の重さを象徴していて、地獄のどこにいくのかが決まるのだが、その木こ

そがマツであり、マツはこの世とあの世の境界に立つ境木であるとしている。

n「女性」、o「女神」:「女性」には、女性が植樹した、あるいは女性の墓標として植えられたなど、女性が主役として登場するものを挙げた。前述の「安産・子授け」やイチョウにおける「乳信仰」も女性が対象となっているが、主に不特定多数の女性が対象となっているので項目を別にした。ただし、乳信仰と関係するケースでも「聖武天皇の妃の靈験」や「聖武天皇の乳母の遺言」により植えられたイチョウはこの項目と「乳信仰」の両方を含めた。樹種を比較すると「女性」で最も高いのはイチョウである。イチョウは乳信仰もあり、女性の樹としての性格が強い樹種であると言えよう。「女神」には、^{あまてらすおみかみ}天照大御神が降臨して植えたというスギが2本と^{いちきしまひめのみこと}市杵島姫命が植えたというサクラの1本がある。

p「祟り」:幹や枝を伐採したり痛めたりすると、伐った者に災いが及ぶと伝えられているものである。本数も頻度もスギが最も高いが、その理由として二つの可能性が考えられる。一つは木材としての需要が高いため伐られ易い樹であり、故に「祟り」という強力なタブーが神木の伐採を阻止しようとしたという可能性である。もう一つの可能性は、「祟り」の頻度の数値の順番が先に紹介した「伐られて血を流す」の頻度の順番と一致していることと関係する。「祟り」と「血を流す」はどちらも樹を脅かす者に対しての抗議という点において意味が同じであり、二つの伝承が対応していることに不思議はない。

q「杖立て等」:著名な人物が携えていた杖を地に挿してそれが成長して巨樹となったという話は、「杖立て伝説」として全国各地に多数みられる。同系統のものとして『大日本老樹名木誌』には杖の他に、馬のムチ、使っていた箸が成長したという話も出てくるが、これらを「杖立て等」としてまとめた。これらの伝説の主人公は高僧、武将、落武者である。

樹種でみるとイチョウとスギで頻度が高いが、その理由としてイチョウとスギはともに挿し木で根付きやすい樹種であることが考えられる。一方、マツではこのような伝説が乏しく、箸が成長したとする1本だけである。柳田國男は『神樹編』の中で「杖の成長した話」として杖立て伝説を取り上げておりマツの杖立て伝説が希有であることを指摘し、その理由は不明としている(柳田, 1969)。筆者らはマツが樹脂を多く含んでいて粘り気があるため、手に持つ道具としては不向きであるためではないかと考えている。

r「光る」：樹が光を放つという言い伝えはマツとスギにおいて本数が多く頻度も高い。光の発生原因は様々であり、何かが樹上に訪れて光るとするもの（来訪者は天狗、龍王、龍神）、重要なものを指し示す場合（仏像や仏具などが樹下に埋まっている、その樹を伐って仏像を作った、難破船に陸地の方向を示す）、弘法大師が入寂した日に梢が光る、人々が火を掲げる、などがある。

柳田國男もこのタイプの伝承が、龍燈松や龍燈の杉などと称されてマツとスギに多くみられることを指摘しているが、これはお盆の聖霊送りなどで人々が灯りを高く掲げていた習慣が次第にすたれてその記憶が変化したか、人々の掲げる灯籠の火を見誤ったものと解釈している（柳田、1969）。

3. 『朝鮮巨樹老樹名木誌』にみられる

朝鮮半島の樹の特徴

本章では『朝鮮巨樹老樹名木誌』に掲載された樹について、前章の『大日本老樹名木誌』と同様の方式で分析し、朝鮮半島の樹の特徴について述べる。

3-1. 樹種

『朝鮮巨樹老樹名木誌』では掲載されている本数が多く、最も多いケヤキが959本、以下エノキ・ムクエノキ (*Celtis sinensis*, *Aphananthe aspera*) 451本¹⁶⁾、イチョウ 349本、チョウセンアカマツ（アカマツのこと）256本、ヤチダモ (*Fraxinus mandshurica*) 241本、エンジュ (*Styphnolobium japonicum* = *Sophora japonica*) 208本、ヤナギ類 (*Salix* spp.) 99本、チョウセンモミ (*Abies holophylla*) 74本、ハリゲヤキ (*Hemiptelea davidii*) 72本と続く（以下省略）。本数が2位のエノキ・ムクエノキは一つにまとめられているが、本来エノキとムクエノキは別種である。ハングルではこの2種を「뽕나무（ペンナム）」という一つの呼び名で示し両者を区別しないため、同書でも一緒に扱ったものと考えられる。ちなみにムクエノキという呼び名もムクノキの別名であるが、本論文では『朝鮮巨樹老樹名木誌』の表記のままムクエノキで通すことにする。

掲載本数を見ると6位のエンジュと7位のヤナギの間に数の開きがあり（208本と99本）、以下の樹のデータの分析は『大日本老樹名木誌』と同じく6種を対象とした。

『朝鮮巨樹老樹名木誌』には生育地域が記されている。これら6種についてみると、アカマツは全土に分布し、ケヤキ、イチョウ、エンジュは北部の一部の地域（ケヤキとイチョウでは平南、平北、咸北、エンジュでは平南、平北）を除く地域に、エノキとムクエノキは南部に、ヤチダモは北部に分布する。

3-2. 樹の所有者

『朝鮮巨樹老樹名木誌』における巨樹の所有者を表3に示す。これによると公有地に多いことが分かる。先に行政区分について説明しておく、朝鮮王朝時代の行政区分の最小単位は「里」であり、「里」が集まって「面」を構成していた。朝鮮王朝末期から日本統治下にかけて、行政上の便宜を図るために再編が行われ、都市部では「里」が「洞」と改称され、また一部の地域では「里」が「町」や「村」に改称された所もあった。しかし、これら「里」「洞」「町」「村」が行政区分の最小単位であることは変わらない。

樹の所有者はこれら公有地のうち「里」と「洞」に多い。そのうちヤチダモ以外の5種は「洞」より「里」の割合が高い。ヤチダモでは「村」所有のものが5本存在するが、他の樹種では「村」所有の樹は見られない。ヤチダモの所有者がこのような特徴的である原因は不明であるが、分布をみるとヤチダモは平安南道が全体の約5割を占め、これに黄海道と慶尚北道の二つを含めると全体の9割を占めている。この地方では「里」から「村」に変えることが多かったことを示しているのかもしれない。

「里」及び「洞」という最小の地域共同体が所有する巨樹が多い理由は、後述するように、地域の祭事や祈祷に結びついた樹が多いためと考えられる。

エンジュは国や面といった大きな行政区が所有者となっている割合が他の樹種よりも高い。地名を見ると「府内」「城内」「衛庁」「郡庁」などと記されていて役所や城の敷地内に植えられているものや、役人が植えたという伝説を持つものが17本ある。エンジュは中国原産である。周の時代に宮中に3本のエンジュが植えられていて3人の大臣がそれぞれ樹に向って座る習わしだったので、ここからエンジュが高官の地位を表す言葉となり、役人達が高官の地位につく時、退官する時に庭にエンジュを植えるようになった（上原、1961）。朝鮮半島でも中国と同じく富貴や出世栄達のシンボルとして、身分の高い者に好んで植えられたことを反映しているのだろう。

朝鮮半島の特徴として、「宗中」と呼ばれる氏族集団の所有する樹がある。宗中とは姓や本貫（姓氏発祥の地）を共有する氏族（親族）集団のことであり、氏族（親族）全体で大切にしている樹である。「個人」の項目に含めた樹の中にも、実態は「宗中」の樹として扱われている樹が含まれている可能性がある。「宗中」が所有する巨樹はイチョウでその割合が高いが、他の樹種でも見られる。

イチョウは学校、仏教関係の施設、儒教関係の施設において最も割合が高い。韓国ではイチョウを「学問の樹」と称することがあるが、それを裏付けるデータとなっている。特に、儒教関係の施設ではイチョウが30本以上あるのに対して他の樹種では1本も見られない。

表3 『朝鮮巨樹老樹名木誌』の掲載本数上位6種における所有者

Table 3 Owner of trees of the major six species in *Chosen Kyoju Rouju Meiboku-shi*

所有者		ケヤキ (959本)		エノキ・ムクエノキ (451本)		イチョウ (349本)		アカマツ (256本)		ヤチダモ (241本)		エンジュ (208本)	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
公有	国	53	5.5	30	6.7	34	9.7	12	4.7	13	5.4	28	13.5
	面	3	0.3	3	0.7			2	0.8	1	0.4	5	2.4
	町	1	0.1									1	0.5
	村									5	2.1		
	洞	217	22.6	50	11.1	28	8.0	33	13.0	92	38.2	47	22.6
里	501	52.2	282	62.7	104	28.0	89	34.8	67	27.8	86	41.3	
個人・氏族等	個人	156	16.3	74	16.4	106	30.4	76	30.0	49	20.3	32	15.4
	宗中	1	0.1	1	0.2	4	1.1	3	1.2	1	0.4	2	1.0
	その他							1	0.4			1	0.5
学校	学校					8	2.3			1	0.4	2	1.0
仏教	寺	7	0.7			10	2.9	6	2.3	1	0.4	1	0.5
	仏教堂			3	0.7								
キリスト教	教会							1	0.4				
	聖教堂	1	0.1										
儒教	経学院					1	0.3						
	郷校					26	7.4						
	書院					2	0.6						
	書堂					3	0.9						
	文廟					1	0.3						
その他			1	0.2									
不明		19	2.0	6	1.3	22	6.3	33	12.9	11	4.6	3	1.4

3-3. 「故事伝説」にみられる特徴

『朝鮮巨樹老樹名木誌』には「故事伝説」という項目が設けられており、『大日本老樹名木誌』と同様に各々の樹にまつわる伝承、歴史、信仰、習俗・慣習が幅広く記されている。それらを整理し、まとめたものを表4に示す。日本とは異なり、習俗・慣習に関わる内容のものが多く、樹の形態や生理の特徴が表れているものは少ない。以下、習俗・慣習との関係性の強いものから述べていくことにする。

a 「祭り・祈祷」：すべての樹種において圧倒的に多い内容である。「祭り」は年に1度、あるいは春秋2回、年3回のこともあるが、定期的に樹の下で祭事を取り行う習慣である。これは朝鮮半島に古くから伝わる自然崇拜に根ざした地縁中心的な農耕儀礼であり、里や洞といった小さな地域共同体が主体である。場所は、巨樹の他にも巨石だったり洞窟だったり、地域共同体のシンボルとなる自然物の下で行われる。祭事を行なうために植えたと言いつたえられる樹もケヤキで5本、アカマツとヤチダモで1本ずつある。

「祈祷」の内容は様々で、富であったり子孫繁栄であったり病気平癒であったりする（子供を授かるよう願う場合も多く、これは独立して項目を設けた）。しかし「祭り」と「祈祷」の区別は実際のところ難しい。祭事においては、樹を

祀ると同時に村の安寧や住民の健康を祈願するという意味があるし、一方、「祈祷」として記されているわけでもない。一例を挙げると「毎年立春ノ夜祈祷セハ里内無事ナリト云フ」と記されているものがあるが、これは祈祷という言葉を使っているが、その内容は「祭り」と違いはなく、この二つをはっきりと区別することはできない。そこで、「祭り」と「祈祷」を一つの項目として扱うことにした。

実際のところ祭事と祈祷には重なりあう部分がある。『民俗文芸双書45 朝鮮の民俗』（任、1969）によれば祭事には次のようなものがある。1) 疫病を追い払う驅疫祭、2) 死霊を慰めて悪鬼となるのを防ぐ鎮魂祭、3) 運勢の悪い年に厄を退ける除厄祭、4) 子孫の盛昌、家運の繁栄、事業の繁昌などの福が来るように祈る招福祭、5) 陰暦正月15日前行ない、一年の家中の幸福を祈り、災厄を予防することを目的とする度厄祭、6) 災厄や事故をあらかじめ探り当て予防する予探祭、7) 穀物の収穫を終えた秋に行ない、ほとんどの家庭で行なわれている城主祭、8) 陰暦正月15日前後に山の麓や峠には石を積み重ねるか、または巨樹の下にて部落共同で集団的に神を祀る城隍祭、9) 村に各々存在する鎮山（村を象徴し村を守護する山）の神を部落共同で祭り村の安泰を願う山祭（山神祭や洞神祭と

表4 『朝鮮巨樹老樹名木誌』の掲載本数上位6種における伝承の内容

Table 4 Folklore of trees of the major six species in *Chosen Kyoju Rouju Meiboku-shi*

伝承の内容	ケヤキ (959本)		エノキ・ムクエノキ (451本)		イチョウ (349本)		アカマツ (256本)		ヤチダモ (241本)		エンジュ (208本)	
	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%	本数	%
a 祭り・祈祷	285	29.7	79	17.5	33	9.5	51	19.9	57	23.7	59	28.4
b 祟り(全体)	119	12.4	36	8.0	35	10.0	15	5.9	38	15.8	18	8.7
祟り(祭り・ 祈祷と関連)	9	0.9	1	0.2	2	0.6	0	0.0	11	4.6	1	0.5
		7.6*		2.8*		5.7*		0.0*		28.9*		5.6*
c 子授け	14	1.5	2	0.4	3	0.9	0	0.0	0	0.0	6	2.9
d 占い	67	7.0	14	3.1	10	2.9	1	0.4	0	0.0	9	4.3
e 予兆	10	1.0	2	0.4	11	3.2	0	0.0	1	0.4	2	1.0
f 風水	0	0.0	0	0.0	1	0.3	0	0.0	1	0.4	0	0.0
g 儒教	2	0.2	0	0.0	14	4.0	0	0.0	1	0.4	0	0.0
h 仏教	4	0.4	1	0.2	7	2.0	1	0.4	0	0.0	0	0.0
i 動物よけ	9	0.9	1	0.2	2	0.6	1	0.4	0	0.0	0	0.0
j 弓術	6	0.6	3	0.7	0	0.0	1	0.4	7	2.9	0	0.0
k 乱を経験	7	0.7	2	0.4	3	0.9	3	1.2	1	0.4	0	0.0
l 血を流す	0	0.0	0	0.0	3	0.9	1	0.4	0	0.0	0	0.0
m 先祖が植樹	7	0.7	6	1.3	7	2.0	6	2.3	7	2.9	5	2.4
n 開拓時に植樹	6	0.6	2	0.4	3	0.9	3	1.2	0	0.0	0	0.0

* 祟り(全体)に対して占める割合を示している。

も呼ばれる), 10) 別神祭(地方によって内容を異にしている), 11) 春や秋に新しい作物や米や果物を祖先の廟前に捧げて祈祷する薦新祭である。

このように祭事といってもその性格は様々である。必ずしも任が分類した通りに明確に区別できるようなものではなく、地域の違いや時代の推移により少しずつ融合・分化が起きていると考えられる。任の分類では(8)の城隍祭にのみ巨樹の下で行う趣旨のことが記されているが、『朝鮮巨樹老樹名木誌』の記述をみるとこれに限らない。さらに、筆者らの実地調査の例を紹介すると、任が(9)「山祭」の儀式として「夜、子正をすぎ一番鶏がなくと、本格的な祭りが始まる。祝官が読む詠祝が終わり、全村民の世帯主の運勢を祈る焼紙(ソジ)を上げる。」と記しているのと同じ儀式が、韓国亀尾市農所里で巨樹イチョウの下で行なわれるのを目撃している。地域のシンボルである天然記念物のイチョウの周りに禁縄(「금줄」クムチュル)を張り巡らせた神域の中でとり行われ、深夜午前0時に祭りが開始され、祝官二人と地区長の3名が巨樹イチョウの前で焼紙を投げる儀式が行われた。儀式の間、村人は禁縄の外で無言で立っていなければならない。その後、集会所で男性だけによる宴会が行われ、神木のイチョウの前に捧げられた供物を食べた。

b「祟り」: 祟り自体は習俗・慣習とは違うが、内容的にka「祭り・祈祷」に重なる部分があるので続けて紹介する。祟りの内容は、枝や幹を伐ると祟るという言い伝えが圧倒

的に多い点では日本の場合と同じであるが、朝鮮半島では祭事や祈祷を行なわないと悪疫が流行するというものも多くみられる。あるいは「祭を行なう者は幸福がさずかり、伐採する者は病気になる」「枝を折取る者に天罰。洞祭をしないと里に不幸が多い」というように両方が示されている場合もある。表4では「祟り」全体の数値と、その中から「祭や祈祷をしないと祟る」というものを取り出した数値を示した。「祟る樹」の頻度が高い上位2種はヤチダモとケヤキだが、この2種は「祭や祈祷をしないと祟る」頻度も高く、それが全体の数値を高くしているといえる。特にヤチダモではその頻度が他の樹種と比べて抜きん出て高いが、その理由は分からない。

c「子授け」: 樹に子授けを祈願するものをまとめた。ただし日本とは異なり、安産に関わるものはなかった。また、日本では性別を特定しているものは見られないが、『朝鮮巨樹老樹名木誌』では男児に限定しているものが3本みられた(ケヤキ2本、エンジュ1本)。樹種ではケヤキとエンジュにおいて頻度が高い。日本のケヤキではこのような言い伝えは1本も記載されていない。また、エンジュは日本にも自生するが、『大日本老樹名木誌』に記載されているエンジュは8本と少なく¹⁷⁾、そのうちの6本が朝鮮半島のものである。朝鮮半島においてエンジュが親しまれていることが分かる。

d「占い」: 樹の様子をみて作物の豊凶を占うというもの

をまとめた。このような慣習を有するのは日本と同様落葉樹が多く、常緑樹では少ない。特に芽吹きに関するものが多く、ケヤキとエノキ・ムクエノキでは発芽の良否で豊凶を占うとするものがほとんどである（1本だけ発芽の時期で田植えの時期を知るという日本と似たパターンのものがある）。イチョウでは落葉に関するものが二つあり、いずれも一晩で落葉すると翌年は豊作としていて、日本の場合のように降雪と関係しているものはない。一晩で落葉するという現象は実際に知られており、日本でも寒暖の差が激しい地域では晩秋の寒い日に風もないのに音を立てて一斉に葉が落ちていく様子がニュースで伝えられることがある。

e 「予兆」：樹が突発的な大事件を予言するという内容のものを挙げた。樹が鳴動すると国や村に変事が起きるといいうものが多い。樹に表れる変化としては「鳴動する」「泣く」というものが7割を占め、他に「枝が折れる」「枝がひとり曲がって、また戻る」「樹が光る」というものがある。予告されるものは「変事」「災害」「洪水」「火事」といった凶事が多いが、「吉事が起きる」「科挙に合格する者が出る」といった良いことも予告する。また「郡守」が免職になるといいうものもケヤキで3本あり、朝鮮王朝時代それが民衆にとって大事件であったことが伺われる。樹種別にみるとイチョウで頻度が高いのが特徴的である。なお、イチョウでは「泣くと凶作」という農業に関するものが3本あり、上記の「古い」と似ているが、季節的な生理現象による古いではなく、突発的な樹の異常によるものなので、この項目に含めた。

f 「風水」：数は2本と少ないが、日本では見られないタイプとして風水に基づいて樹を植えたと言えられるものを挙げた。村が船の形をしているので帆を立てる目的で植えられたとするものがイチョウとヤチダモで1本ずつ記されている。風水は村や町の形成に非常に深く根付いており、この二つは行舟形と呼ばれるタイプである。『朝鮮巨樹老樹名木誌』には載っていないが、筆者らが調査した光州広域市漆石洞の天然記念物の巨樹イチョウも風水に基づいているとされ、村の形を寝ている牛の姿（臥牛形）に見立て、牛が逃げないように繋いでおく目的でイチョウが植えられたと言われている。

g 「儒教」：儒教に関わる内容は、イチョウの樹が圧倒的に多いが、3-2で触れたように儒教の学校にイチョウが植えられているためであり、「(学校) 創建時に植えた」あるいは「孔子の杏壇に倣って植えた」と記されているものが多い。「杏壇」というのは、孔子が弟子たちを教えた学校に杏が植えられていたのだから名付けられたとされる。正しく

は「杏」はアンズであり、イチョウ（銀杏）ではないのだが、同じ字にちなんでイチョウで代用したのかもしれない。

イチョウは中国原産であり、有史以降は中国の揚子江の南部にのみ生育しており、11世紀の半ばに宋の都に入り、朝鮮半島や日本に渡ったのはさらに後のことであると考えられている（堀・堀、2005）。朝鮮半島にいつごろイチョウが伝わったのかは定かではないが、イチョウが今日のようにポピュラーな樹になった背景の一つに儒教との密接な繋がりがあったと考えられる。

h 「仏教」：仏教に関する内容は、「僧が植えた」「寺の創建時に植えた」「かつてこの場所は寺であった」というものである。ケヤキ、エノキ・ムクエノキ、イチョウで見られるが、ここでもイチョウが最も本数も多く頻度も高い。そこで、仏教及び儒教とイチョウの関係を比べてみると、故事伝説に記されている本数では儒教が多く仏教が少ない。しかし幹の太さの数値を並べてみると1, 7, 27, 41位が仏教寺院、22, 38, 55位が儒教施設となっていて、仏教寺院の方に太い樹が存在する。太ければ古いとは限らないが、寺院の樹の方が古いと考えたくなる。残存する巨樹イチョウが寺院で少ないのは、朝鮮王朝時代に起こった仏教への迫害政策の結果と考えられる。高麗時代には仏教が隆盛を極めたが、朝鮮王朝が建国されると儒教は国の規範として奨励され、逆に仏教は迫害され、高麗王朝末期には1万以上あった寺が、朝鮮王朝三代目国王太宗の治世（1400-18）には、242までに減り、四代目国王世宗の治世（1418-50）には、18の寺だけを残して他を廃したという（孫, 1998）。従って、寺院に現存する巨樹イチョウが少ないのは当然のことである。ちなみに、1番と7番の寺院のイチョウはともに新羅時代に植えられたと言えられ、現在ともに天然記念物に指定されているが、これら寺院は朝鮮王朝時代の迫害を免れている¹⁸⁾。

i 「動物よけ」：樹に虫や猛獣が寄ってこないというもので、ケヤキに多いが、エノキ・ムクエノキ、イチョウ、アカマツにもみられる。日本には見られないタイプの言い伝えであり、朝鮮半島の慣習に起因すると考えられる。朝鮮半島では亭子（「정자」チョンジャ）と呼ばれる屋根付きの縁台がいたる所にあつて人々が集まって談笑している光景がみられる。亭子は三国時代から存在したもので、宮闕・庭園・集落・住宅などの中に、あるいは景勝地の山河の中に作られ、今日でも新しく建て続けられている（山中, 2003）。もともとは風情を楽しみ、その中で学問を学び、精神修養のための建物であった。傍に巨樹が存在することも多い。実際、このような樹が不快な虫や危険な獣を寄せ付けないという特別な性質を有しているとは考えられないが、巨樹

の下に人が憩うという上ではまことに好都合な性質であることから生まれた言い伝えであろう。これを裏付けるように「蟻が寄って来ないので避暑に便利」と記されているものもある。

j「弓術」:これは「樹下で弓の練習をした」あるいは「この地はかつて射亭(弓の練習場)であった」と伝えられる樹であり、日本では見られないタイプの言い伝えである。

樹種ではヤチダモに多く、7本が載っているが、そのうち6本は黄海道安岳郡の樹であり、龍門面が4本、文山面が2本である。またケヤキでは6本がこの伝説を有するが、そのうち5本は全南道寶城郡鳥城面に存在する。また、エノキ・ムクエノキの3本のうち1本もこの面存在する。このタイプの伝説がヤチダモに多い理由や、特定の地域に集中している理由は不明だが、弓術の盛んな地域は特に偏っていたわけではなく、昔から全土で好まれていたようである。『朝鮮の民俗』(任, 1969)によると朝鮮半島では昔から弓術が盛んで、3月に方々の射亭でクンスルへ(弓術会)が催されるとある。また、『韓国の歳時習俗』(張, 2003)によると朝鮮王朝初期の『東國輿地勝覽』¹⁹⁾に南原地方(今の全羅道)の習俗に村の人々が春を迎えると竜潭あるいは栗林に集まってお酒を飲みながら弓を射ることで礼としたという記録がある。

k「乱を経験」:戦乱を経たと伝えられる樹をまとめているが、ここでいう乱のほとんどが「壬辰倭乱」あるいは「三乱」を経験したと記されている。壬辰倭乱は豊臣秀吉による朝鮮出兵のことで、日本でいう文祿の役(1592)と慶長の役(1597)を総称したものである。「三乱」とは壬辰倭乱と、1624年におきた李适の乱、1636年に清が李氏朝鮮を制圧した丙子胡乱をいう。樹種の比較において特に目立つ特徴はなく、この言い伝えは、樹の古さを表すのに適当な表現なのであろう。これらの戦乱がいかに国家に衝撃を与えた大事件であったかが表れている。

l「血を流す」:伐られて血を流す樹の言い伝えが、イチョウで3本、アカマツで1本掲載されている。興味深いことに『大日本老樹名木誌』ではイチョウが血を流す話はみられず、この伝説の参考資料として先に挙げた他の二つの資料(日野, 1978; 北條, 2003)においてもイチョウはみられない²⁰⁾。逆にケヤキは、日本の資料では『大日本老樹名木誌』および他二つの資料でこの伝説が見られるのだが、『朝鮮巨樹老樹名木誌』では最も本数が多いにも関わらずこの伝説が見られない。

m「先祖が植樹」、o「開拓時に植樹」:先祖が植えたり

開拓時に植えたと伝えられるものであり、日本ではほとんどみられない。「先祖が植樹」は全ての樹種でみられ、樹種による偏りも大きくない。「開拓時に植樹」は、ヤチダモとエンジュではみられないが、突出して多い樹種もない。

4. 日本と朝鮮半島の比較

本章ではここまで述べてきた『大日本老樹名木誌』と『朝鮮巨樹老樹名木誌』のデータの共通点や相違点をまとめるとともに、その背景について考察する。

4-1. 樹種の比較

日本と朝鮮半島では共通する種も多いが、異なる種の存在も目立つ。マツやイチョウは両方のリストの上位に入っているが、日本のリストの上位にあるスギやクスノキは『朝鮮巨樹老樹名木誌』では上位に入っていないばかりでなく、資料自体に1本も載っていない。スギは日本の固有種であるし²¹⁾、クスノキは日本の関東地方の太平洋岸沿い以西の本州から四国、九州、沖縄、さらに台湾、中国南部に自生しているが、朝鮮半島には自生していないからである。また日本ではサクラが上位に入っているが、『朝鮮巨樹老樹名木誌』ではヤマザクラが7本とエゾノウワミズザクラ(資料では「えぞうはみづさくら」)が1本掲載されているのみである。逆に『朝鮮巨樹老樹名木誌』の掲載本数で8位のチョウセンモミ(マンシュウモミとも)や第9位のハリゲヤキは日本には自生していない。

4-2. 「伝説」「故事伝説」の比較

4-2-1. 共通点、相違点のまとめ

共通点と相違点について簡単にまとめてみよう。共通点としては、「子授け」など神木に願い事をする、「樹が血を流す」、「祟り」が挙げられる(ただし、「祟り」については二つの資料でともに数が多い伝説ではあるが、頻度は『朝鮮巨樹老樹名木誌』の方が圧倒的に高い)。

一方、相違点を見ると(共通点よりも相違点が目立つのだが)、最も大きな違いは『朝鮮巨樹老樹名木誌』には地縁・血縁に基づくものが非常に多いことである。巨樹を前にして行なわれる祭事や祈祷や、植樹に関して先祖が植えた、あるいは開拓の際に植えたという話がそれである。風水に基づいて植えたという話も地縁と関連している。一方、『大日本老樹名木誌』にはこのような地縁・血縁に関するものがほとんど見られない。

その他、習俗の違いに起因する相違点として、樹を墓標とすることが朝鮮半島で見られないこと、女性にまつわる伝説が日本に多いこと、樹の変化(発芽、開花、落葉)を日本では気候予測の目安とするが、朝鮮半島では豊凶の占いとしていること、イチョウの乳信仰が日本では見られる

が朝鮮半島では見られないこと、弓術との関わりが朝鮮半島に見られること、が挙げられる。

また、『大日本老樹名木誌』では少なからず見られる「戦勝祈願・凱旋記念」が、『朝鮮巨樹老樹名木誌』ではまったく見られず、対照的に戦乱を経験したという伝承が見られ、両国の歴史の違いを色濃く反映していて興味深い。

また、全体を通して言えることは、『朝鮮巨樹老樹名木誌』では習俗・慣習、宗教に関わる内容のものが多くに対して、『大日本老樹名木誌』では「何かを掛ける、引かかる」「馬や船を繋ぐ」といった、樹を「道具」のように利用したという話や、杖立て・箸立て等の伝説²²⁾、天狗が訪れる樹、光る樹のように超自然的な話など多様なタイプの内容が見られる。

これらの相違点のうち特に目立つものについて以下に補足し、その背景について考察する。

4-2-2. 地縁性、血縁性との関係

『朝鮮巨樹老樹名木誌』における植樹に関する伝承をみると「開拓時（洞や里といった地域共同体が作られた時）に植樹」あるいは「先祖が植樹」とするものが見られる。一方、『大日本老樹名木誌』ではこのような伝承が非常に少ない。朝鮮半島では「樹」は地域共同体や氏族を繋ぎ止める神聖な存在であって、祭りや祈禱を通じてその絆の維持に働いている。このことは、巨樹の所有者の情報からも伺うことができる。『朝鮮巨樹老樹名木誌』では巨樹の所有者は里や洞といった地域共同体が圧倒的に多い。そして日本にはない氏族集団所有の樹もみられる。梁（2000）によれば、朝鮮王朝時代の郷村社会では、「우리동네（ウリトンネ、我々の洞りの意）」意識をもった横の地縁関係の結びつきが強固であり、洞祭は地域の鎮守を守る祭祀して地域の秩序の維持する役割を果たしていた。そして郷村社会は、このようなウリトンネの横の地縁集団と、祖先祭祀を軸に組織される縦型親族集団が会う世界であった。

一方、『大日本老樹名木誌』では神社や寺院が所有する樹が多い。もちろん神社も寺院も地域共同体のための宗教施設として機能していることが多く、境内の巨樹を神木として尊崇するという点では同じである。しかし、神社や寺院の信仰が向う対象は、建物の中に祀られている御神体や御本尊がその主体であるのに対し、朝鮮半島では樹そのものにその役割が集約されている点で大きく異なっている。日本でも神木の下で催される祭事はあるが、朝鮮半島に比べるとはるかに少ない。また、樹に願いごとをする場合でも、朝鮮半島のように地域や一族の安寧を祈るというような共同体を背景にするものではなく「乳信仰」や「病氣平癒」など個人的なご利益と結びついている。日本と朝鮮半島では、巨樹や石など自然物を畏敬するアニミズムを有す

る点で共通してはいても、朝鮮半島ではアニミズムが地縁性・血縁性と結びついて色濃く残ってきたのに対して、日本では神道や仏教に取り込まれてしまうことにより、地縁性・血縁性に果たす役割が弱まっている。

4-2-3. 植樹者

『朝鮮巨樹老樹名木誌』では、同一人物が異なる地域の巨樹の植樹に関わったという話が少ないという特徴がある。6種の中で同一人物が複数の樹の植樹者として登場するのは7人だが、その多くは樹の所在地が同じである。異なる地域に植えたことが明らかなのは李太祖や官吏など3人であり、しかも彼らが植えた地域はそれぞれ2ヶ所だけである²³⁾（李太祖は3本のアカマツに登場するが、そのうち2本は同じ所在地である）。一方、『大日本老樹名木誌』は6種において空海が8本、源義家が7本、日本武尊が5本、行基が5本、西行が4本、坂上田村麻呂が4本、八百比丘尼が3本、神功皇后2本、と日本各地を巡った者の伝説がそれぞれ複数存在する（場所の重複はない）。赤坂憲雄は『境界の発生』（赤坂、2002）の中で、杖立て伝説における植樹した人物について「これら多彩といつていい人々のうえに見いだされる共通項は、布教や信仰または戦争といった事情は異にするにせよ、旅または遊行ということである。いわば、かれらは村々に定住して農耕にしたがう人々（常民）ではなく、その傍を流離してゆく異人たちである点で一致する。ほぼ例外はない。」と記している。これらの武人、移動する宗教者、漂泊者が植えたとされる樹が本当に本人が植えたものか甚だ疑わしい。むしろ神木としての価値を高める目的で、後付けで作られた話がほとんどであろう。

このような植樹の伝承は、樹の伐採の抑止に働いたに違いない。朝鮮半島の場合は、地域共同体の樹や氏族の樹として機能している限りは、有名人による植樹という伝承で飾り立てる必要はない（しかし、例えば「氏族の樹」の場合に、本当の植樹者とは別に、科挙合格者など氏族の中での出世頭が植えたとするなどのすり替えはあり得る）。朝鮮半島では、「樹を祀ることを怠ると祟る」「伐ると祟る」など祟りの話が日本より多いが、人の畏怖を増長することにより、地域共同体や氏族共同体の絆の安定化が図られるとともに樹が守られてきたと考えられる。

4-2-4. 卜占

すでに述べたように日本と朝鮮半島では「占い」に関する性格が若干異なっている。日本の場合は、開花や落葉を田植えや降雪と結びつけた気候変化の指標としての意味を持つが、朝鮮半島では農作物の豊凶を占うことを主眼としている。朝鮮半島ではこの他に「予兆」や「風水」の項目も同様の文化的背景を有している。朝鮮半島では、村や国

に変事が起こる、役人が罷免される、村内から科挙に受かるものが出る、などの予兆が樹に示されると考えられていた。このような予兆は多くの場合、樹が鳴動したり異音を発することがその徴とされている。「予兆」に含まれる樹は全部で26本であるが、そのうち17本があてはまる。次に多いのは枝が折れるというものであるが、その数は4本と少ない。

「予兆」にあたる伝承は『大日本老樹名木誌』では少ない。凶事、変事を告げる話はスギとケヤキでそれぞれ1本ずつみられるだけである。スギの伝承は、大洪水と大地震の前夜に樹に燈火がついているのが見られたという内容である。ケヤキの伝承は、樹上にやってくる天狗が村の凶事を予言するという内容である。一方、吉事の起きる前に樹に瑞兆が現れたという話も多くない。樹上に紫雲がたなびいて寺院の本尊の出現を示したという話がスギとマツで1本ずつみられる。また、マツの上に鶴が鳴いたことを瑞兆として地名を改めたというものもある。これらは縁起や由緒に関係した話で、1回限りの徴である。このような伝承において大事なものは本尊や地名の由来であり、樹に顕われた予告はそれを飾る脇役である。もちろん、神木がその力を示したことは重要ではあるのだが、その後その力が示されることはない。瑞兆がト占として機能しているという意味では、該当する伝説はスギで1本みられるだけであり、その内容は「国家の吉兆がある時には梢から煙霧が立ち昇る。村人は仕事を休み餅をついて国家の安康を祈る。」というものである。

4-2-5. 女性

『朝鮮巨樹老樹名木誌』には女性が登場する伝承は極めて少ない。ケヤキで三つの事例があるのみである。その内容は、ある美人が植えたので「美人槐」と称する樹、高麗時代に名月という妓女が植えたので「女妓亭」と称する樹、「晋陽鄭氏烈女木」と呼ばれる樹である。女性がほとんど登場しないこと背景には、女性の地位が相対的に低く、社会の表舞台に表れることが少なかったことが考えられる。日本と韓国のことわざを比較した研究では、両国とも男性中心社会にみられる男性優位意識に根ざしたことわざが多いが、その傾向は韓国の方により強く表れていることが指摘されている(金, 2001)。未婚の女性の外出は規制されていたし、身分の高い者では既婚の女性であってもほとんど外出できなかったという。巨樹の伝承に女性が登場する事例が少ない理由には、このような背景があるのだろう。

4-2-6. イチョウの乳信仰

イチョウの乳信仰は全国的に広く見られ、『大日本老樹名木誌』では19本記されているのに対し、『朝鮮巨樹老樹名

木誌』では2本と少ない。

筆者らは韓国の巨樹イチョウの調査を行なっているが、韓国ではよく発達した乳根を持つイチョウが極めて少なく、それが乳信仰を有する樹が少ない大きな理由であろう。なぜ両国で乳根の発達に違いがあるのかは不明であるが、可能性として考えられるのは気候の違いである。乳根は若い樹でも発達しているものがあるが、このようなものは幹に生じた傷口を塞ぐため、表面の組織が盛んに細胞分裂して増殖し、徐々に盛り上がり大きくなっていったと思われるものがある。乳根の発生が、すべてこのような生来の防御メカニズムによるものかは分からないが、もしそうだとすれば日本のイチョウが韓国のものより傷つきやすいということになる。その要因としては、台風や降雪による厳しい気象条件での枝や幹の折損が考えられる。折損した箇所から新しい枝が伸びるとともにその部分に乳根が発生したのではないだろうか。

5. 現存する樹

『大日本老樹名木誌』と『朝鮮巨樹老樹名木誌』に記載されている樹がどの程度現在も残っているか調べた。これら二つの資料では、各樹種が幹周囲の大きい順に掲載されている。そこで、日本と朝鮮半島の上位6種について、掲載順に各樹種20本ずつ現存しているかどうかを2009年から2010年にかけて調査した(表5, 6)。その結果、現存することが確認されたのは、日本では生存率の高い方からイチョウ19本、クスノキ18本、サクラ11本、スギ8本、ケヤキ8本、マツ1本であった。マツが極端に少ない原因は、1905年の最初の被害報告以来、日本全国に広がったマツノザイセンチュウによる松枯れのためであろう(Futai, 2008)。一方、朝鮮半島の樹の生存率については、現在北朝鮮の地にある樹は調査できないので、韓国の地にあるものについてリストの上位から20本ずつ調べた。その結果、生存率の高い方からイチョウ14本、ケヤキ及びエノキ・ムクエノキがそれぞれ8本、エンジュ4本、アカマツ4本、ヤチダモ2本であった。

イチョウは日本でも韓国でも生存率が最も高かった。樹がなくなる原因は、病気による枯死の他に、自然災害や火事や戦争等による被災、そして人為的な伐採などがある。個々の樹がどのような理由でなくなったのか不明であるが、イチョウだけが特に人為的伐採を免れたとは考えられないので、病気に強く、また被災しても回復力が高い樹種と言えるのであろう。

反対にマツ(韓国ではアカマツ)は日本と韓国でもともに生存率が低かった。その原因が日本ではマツノザイセンチュウによる松枯れと推測されることはすでに述べたが、韓国においても同様のことが考えられる。韓国における松

表5 『大日本老樹名木誌』掲載本数上位6種20本ずつの生存数

Table 5 Living trees of the first 20 trees in the six species in *Dai-Nippon Rouju Meiboku-shi*

	マツ	スギ	クスノキ	イチヨウ	ケヤキ	サクラ
生存数	1	8	18	19	7	11

表6 『朝鮮巨樹老樹名木誌』掲載本数上位6種20本ずつの生存数

Table 6 Living trees of the first 20 trees in the six species in *Chosen Kyoju Rouju Meiboku-shi*

	ケヤキ	エノキ・ ムクエノキ	イチヨウ	アカマツ	ヤチダモ	エンジュ
生存数	8	8	14	3	2	4

枯れ病の発生が最初に報告されたのは1988年と比較的近年になってからであるが、その後急速に拡大して多くのマツが枯死したことが報告されている (Shin, 2008)。

6種を全体的にみると日本の巨樹の方が韓国よりも生存率が高い結果となっている。では、日本の方が巨樹の保存状況が良かったかという点、異なる樹種が含まれているため、そう結論づけることはできない。共通する樹種について比べてみると、イチヨウは日本の方が5本多く残っている。一方、ケヤキとマツ (アカマツ) では韓国の方がそれぞれ1本および2本多く残っているが、これは差があまりないと言うべきであろう。

比較対象を増やすために、エノキとムクノキについて日本における生存率を調べてみた。『大日本老樹名木誌』にはムクノキが20本、エノキが16本 (朝鮮半島のエノキが1本含まれている) 記載されている。ムクノキについては、現存することが確認できたものは20本のうち3本であり、エノキについては日本のもの15本のうち現存することが確認できたものは1本のみであった。よって、これらについては韓国における生存率の方が高い結果であった。

このような樹種による生存率の違い、あるいは同じ樹種における国による生存率の違いが何に起因するかは、調査した個体数が少ないことや、樹がなくなった原因が分からない樹が多いこともあって、これ以上ははっきりしたことは言えない。しかし、多くの樹が失われてしまったことは確かである。幹周囲の大きい方から調べた結果がこの通りであるから、もっと小さな樹については、より生存率が低いことであろう。

おわりに

以上、大正時代に刊行された『大日本老樹名木誌』と『朝鮮巨樹老樹名木誌』を基に日本と朝鮮半島の巨樹について

樹種や伝説を比較した。気候や植生において共通点の多い日本と朝鮮半島ではあるが、日本では身近なスギやクスノキが朝鮮半島には存在せず、日本ではあまり身近な樹とは言えないヤチダモやエンジュが朝鮮半島では親しまれている。日本でも朝鮮半島でも巨樹は尊崇され、あるものは願いを叶えてくれるありがたい存在であり、またあるものは大切にしないと祟る怖い存在である。とは言え、4章で述べたように伝説を詳細に比較すると多くの相違点が見いだされ、それらは歴史、宗教、習俗、精神性の違いと密接に結びついている。

また、『大日本老樹名木誌』と『朝鮮巨樹老樹名木誌』が刊行されて90年以上経ち、当時と比べて巨樹と人との関係が変化した点もある。例えば日本のイチヨウにおける乳信仰は、粉ミルクの出現により必要のないものとなり形骸化した。また朝鮮半島のイチヨウにおいても儒教の教育施設に植えられ「学問の樹」と呼ばれていたが、教育制度の変化によってその意味が忘れられようとしている。さらに、祟りやト占のような非科学的な伝承も、話としては残るのかもしれないが、それが果たしてきた機能は弱まり、今後も弱まっていくことは間違いないであろう。このように社会情勢や人々の生活環境・教育環境の変化にともなう、巨樹と人々の関係のありようが変わっていくのは仕方ないことである。これはここ90数年間に限って起きただけではなく、巨樹が生きてきた何百年、あるいはそれ以上の年月の間にこのような変化はあったに違いない、時代とともに変わっていくのがむしろ当然である。しかし巨樹と人との関係性が変化するに伴って、それ以前の関係性が忘れ去られてしまうのではもったいない。長命な巨樹は過去・現在・未来の人々を繋ぐ貴重な存在であり、樹の命とともに樹をとりまく文化や精神性を残すことができる。前章で述べたように、現在はなくなってしまった巨樹が多いことは残念である。しかし今日、日本や韓国の巨樹を訪ねると樹木医による治療を受けたものが多いことに気づく。樹の保護・管理の体制や延命の処置については、昔に比べて進歩しており、これは巨樹の将来にとって明るい話である。

謝 辞

本研究は三菱財団法人人文科学研究助成「日本・東アジアにおけるイチヨウの伝播・交流に関する学際的研究」(研究代表者: 瀬田勝哉) の成果の一部である。なお、本稿について査読者および編集委員長から貴重なご意見をいただいた。深く感謝の意を示し、御礼申し上げます。

註

1) 柳田國男『神樹篇』(実業之日本社, 1953) には、明治44年(1911)から昭和26年(1951)にかけて発表された

神木に関する18編の論文が収められている(『柳田國男集 第十一集』, 筑摩書房, 1969年再録)。

2) 朝鮮及満州社編『朝鮮地誌(朝鮮満蒙地誌叢書第一輯)』(大正7年(1918))は『朝鮮地誌 朝鮮満蒙地誌叢書①』(クレス出版, 2000)として再発行された。鴨緑江や豆満江上流には広大な森林が広がっていることは67頁に、樹木の生育状態は日本と同一の点が多いことは322頁に、植林や森林管理については320-324頁に記されている。

3) 1990年に環境庁(当時)から『第4回自然環境保全基礎調査巨樹・巨木林調査報告書(全国版)』と『同(概要版)』が刊行された。そして1991年に環境庁から同調査の地方版『第4回自然環境保全基礎調査 巨樹・巨木林調査報告書(北海道・東北版)』、『同(東海版)』、『同(甲信越・北陸版)』、『同(関東版1)』、『同(関東版2)』、『同(近畿版)』、『同(中国・四国版)』、『同(九州・沖縄版)』が刊行された(いずれも大蔵省印刷局発行)。いずれも環境省の生物多様性情報システムのウェブサイトからダウンロードすることができる(http://www.biodic.go.jp/kiso/13/13_kyoju.html)。

4) 環境省自然環境局生物多様性センター編, 2001, 『第6回自然環境保全基礎調査 巨樹・巨木林フォローアップ調査報告書』, 財務省印刷局, 東京, 総頁数284。これについても3)と同じく環境省の生物多様性情報システムのウェブサイトからダウンロードすることができる(http://www.biodic.go.jp/kiso/13/13_kyoju.html)。

5) 奥多摩町日原森林館, 巨樹巨木林データベース, <http://www.kyoju.jp/data/index.html>。

6) 韓国国立樹木園(Korean National Arboretum), 国家生物種知識情報システム, <http://www.nature.go.kr/wkbik0/wkbik0003.leaf>

7) 本論文では種名を片仮名表記とした。理由は、同じ漢字が別種を表す場合があるからで、日本ではクスノキを表す「楠」の漢字が朝鮮半島ではヤチダモを表し、同様に日本でヒノキを表す「檜」「檜木」は、朝鮮半島ではチョウセンモミを表している。

8) 「史蹟名勝天然記念物保存要綱草案(續)」, 1918, 『史蹟名勝天然記念物』第二巻第二號9頁, 『史蹟名勝天然記念物』は史蹟名勝天然記念物保存協会の会報であり, 不二出版(東京)から復刻されている。

9) 三好学の「天然記念物保存の必要並に其保存策に就て」(明治40年(1907), 太陽13(1): 169-175, 13(2): 169-182)では、「名木」という言葉は使われているが「巨樹」という言葉はなく「大木」あるいは「大きい立派な樹木」と表現されている。また「老樹」という言葉も使われておらず、「老木」と書かれている。その後『日本之植物界』(明治43年(1910), 丸善)には「老樹」という言葉が使われている。しかし「巨樹」という言葉はここでも見あたらず、「大木」あるいは「巨大」と表現されている。

10) 大正5年(1916)6月20日に朝鮮総督府が発令した通牒第95号「巨樹名木ノ保護ニ関スル件」には、巨樹名木または史蹟に關係する樹木が、近頃家屋の建造その他の機会に伐られたり、迷信の打破という名目でいたずらに毀損されているとし、保存を図ることとしている。1985年に亜細亜文化社(ソウル市)より発行された韓国学文献研究所編『朝鮮総督府官報25』(263-264頁)を参照した。

11) 小椋純一「明治中期における京阪神地方の里山の景観」(1992, 京都精華大学紀要No. 3: 157-181)には、明治14年(1881)~明治17年(1884)にかけて作成された『京都府地誌』において比叡山の山林が愛宕郡では「全山巨樹森林ナシ只榛荊生ス」、修学院村では「山中巨樹少ナク唯榛荊ヲ生ス」と記されているとある。ここに登場する「巨樹」という言葉は榛荊(高さ五尺程度以下の矮小な雑木)と対比して用いられており、巨樹は榛荊より高い樹という程度の意味であると解釈される。

12) 『朝鮮巨樹老樹名木誌』の第二編第二(187-188頁)に禁養のために設けた区分について詳しく説明されている。

13) 『朝鮮巨樹老樹名木誌』におけるこのような神木の定義は「精霊・神霊が宿り、或は憑依すると信仰されている樹木を霊樹・神木とする現代日本の宗教民俗学の定義と変わらない(長野 覺, 2006, 山岳聖域の自然林と神木, 宗教民俗研究No. 14・15(合併号): 96-146)。一方、『大日本老樹名木誌』では「神木」というものを特に意識して調査されたか疑問である。個々の樹の「伝説」の項目の中には「神木」とはつきりと記されているもの、伝承の内容からそれと分かるもの、あるいは注連縄が張られているだけ記されたものがあり、これらは「神木」と捉えられるが、見逃されているものも多いと思われる。

14) 「巨樹・巨木林データベース」に登録されているサクラ265本である。またアカマツとクロマツはそれぞれ813本, 1029本載っており, これらは『大日本老樹名木誌』と同じように一緒に数えた。また, クスノキ, ケヤキ, イチョウ, スギはリストに記載されている数は膨大になるので, 幹周囲が6m以上の樹のみとし, クスノキ921本, スギ1469本, イチョウ518本, ケヤキ670本を対象とした。

15) 掲載されているすべての樹に故事伝説が記されているわけではない。また、「伝説」の項目に記されている内容すべてが表に入っている訳ではなく、分類の際に用いたキーワードに合致したものだけを表に挙げている。たとえ特徴のある興味深い内容でも、その樹にしか見られないものはここでは省き、もし紹介する必要があると考えたものは本文中で適宜取り上げることとした。また、1本の樹の有する伝承が表の複数の項目に合致していれば、各項目に加算している。

16) 史料では番号が1番から470番までついているが、途中244番から262番までが抜けている。頁が抜けているわけではないので製本段階でのミスではなく、編集の際にデータを入れ忘れたか、番号の打ち間違いだと思われる。

17) 『大日本老樹名木誌』の日本のエンジュの1本は、福岡県の宇美八幡宮の神木である。この樹は神功皇后が朝鮮出兵から戻りこの地で応神天皇を産する時に、逆さに地に挿して東に向いた枝に縋って安産し、それが根付いて大木になったと伝えられている。それにちなんでこの樹は「子安の木」と呼ばれ、安産の守り神となっている。子授けと安産は意味する所に若干の違いはあるが、宇美八幡宮のエンジュの伝説ができあがる際に朝鮮半島の子授け伝説が下地としてあったのか興味深い。

18) 1番は京畿道楊平郡龍門面の龍門寺、7番は忠清南道錦山面南二面の寶石寺である。この二つの寺を訪ねたが、イチョウが新羅時代に植えられたという証拠が残っている訳ではない。迫害を免れ、新羅時代から続く寺なので、そのような言い伝えが生じたものであろう。また、世宗は仏教を迫害したが、龍門寺のイチョウに官位を与えたとも伝えられている。

19) 『東国輿地勝覧』は朝鮮王朝が1481年に編纂した地理書であり、1531年にこれを増補した『新增東国輿地勝覧』が編纂された。現在『東国輿地勝覧』は残っていないが、その内容は『新增東国輿地勝覧』に全て含まれているとされる。

20) イチョウに血を流す伝承がまったく存在しないわけではない。幹周囲が日本一の青森県深浦町北金ヶ沢のイチョウには、大正4、5年(1915、1916)のこととして、イチョウが赤い血を流して泣いている夢を1週間続けて見る者がおり、気になって見に行くとイチョウの乳が切られていて、切り口が赤くなっていたという話が残されている(深浦町編『深浦町史』下巻、1980、616 pp. 深浦町役場発行)。

21) スギはかつて鬱陵(ウルルン)島に生育していたとある(上原敬二、1961、樹木大図説 第一巻、339頁、有明書房)。

22) 『朝鮮巨樹老樹名木誌』ではこれに類する伝説は、6種の中ではイチョウで1本あるのみである。同書全体をみても他にはチョウセンカラマツに1本あるのみである。しかしそれらの内容は、ともに仏教の僧侶が携えていた杖が成長したというもので、日本の杖立て伝説と共通している。

23) エノキ・ムクエノキの227番は慶尚南道の樹であるが、郡主であった鄭寒岡が植えた」と記されている。また、イチョウの38番は慶尚北道の樹であるが、鄭寒岡が植えた」と記されている。鄭寒岡が鄭寒岡の誤植で同一人物であるとすれば、同一人物が異なる地の樹を植えた例が加わる。

引用文献

赤坂憲雄、2002、境界の発生、330 pp. 講談社、東京。
有岡利幸、2005、資料 日本植物文化誌、507 pp. 八坂書房、東京。
張 籌根 (小玉仁夫訳)、2003、韓国の歳時習俗、291 pp. 法

政大学出版、東京。
Futai, K. 2008. Pine wilt in Japan: from first incidence to the present. "Pine Wilt Disease" (Zhao, B. G., Futai, K., Sutherland, J. R. & Takeuchi, Y., eds.), 26–32. Springer, Tokyo.
日野 巖、1978、植物怪異伝説新考、275 pp. 有明書房、東京。
本多静六、編、1913、大日本老樹名木誌、434 pp. 大日本山林会、東京。
堀 輝三・堀 志保美、2005、写真と資料が語る総覧・日本の巨樹イチョウ—幹周7 m以上22 m台までの全巨樹、218 pp. 内田老鶴圃、東京。
北條勝貴、2003、伐採抵抗・伐採儀礼・神殺し—開発の正当化/相対化—。「環境と心性の文化史 下」(増尾伸一郎・工藤健一・北條勝貴編)、51–144. 勉誠出版、東京。
任 東権、1969、朝鮮の民俗(民俗文芸双書45)、280 pp. 岩崎美術社、東京。
石戸谷 勉、1919、朝鮮巨樹老樹名木誌、197 pp. 朝鮮総督府。
姜 東鎮(高崎宗司訳)、1987、韓国から見た日本近代史 下、284 pp. 青木書店、東京。
金 秀眞、2001、日韓両言語における諺の対照比較研究—男性観と女性観を巡って—。広島大学大学院国際協力研究科「国際協力研究誌」8: 33–50。
牧野和春、1986、巨樹の民俗学、236 pp. 恒文社、東京。
牧野和春、2000、日本巨樹論、212 pp. 惜水社、坂戸市。
牧野和春、2002、新 桜の精神史、244 pp. 中央公論新社、東京。
野本寛一、1994、共生のフォークロア 民俗の環境思想、344 pp. 青土社、東京。
野本寛一、2008、生態と民俗、417 pp. 講談社、東京。
瀬田勝哉、2000、木の語る中世、254 pp. 朝日新聞社、東京。
Shin, S.-C. 2008. Pine wilt disease in Korea. "Pine Wilt Disease" (Zhao, B. G., Futai, K., Sutherland, J. R. & Takeuchi, Y., eds.), 5–12. Springer, Tokyo.
孫 敬壽、1998、韓国教育機関の変遷、月刊「韓国文化」No. 222: 16–19。
竹内虎太郎、1975、緑化用樹木の実生繁殖法、271 pp. 創文、東京。
坪井洋文、1974、しんぼく 神木、「神道要語集 祭祀篇一」(國學院大學日本文化研究所編)、107–112. 神道文化会、東京。
上原敬二、1961、樹木大図説 索引共全4巻、4316 pp. 有明書房、東京。
山中冬彦、2003、集落の亭と景—韓国安東市素山里三亀亭と八景、岐阜女子大学紀要 32: 167–176。
山中勝次、1984、針葉樹二次師部の樹脂道、木材学会誌 30: 347–35。
柳田國男、1969、柳田國男集 第十一集、548 pp. 筑摩書房、東京。
梁 愛舜、2000、郷村社会の親族と近隣結合—契・ブマシ・トゥレを中心に、立命館産業社会論集 35: 59–81。
(2011年10月24日受理)